

ネルヴァルと歴史のエクリチュール

——『塩密輸入たち —ビュコワ神父の物語』を中心に——

辻 川 慶 子

歴史の世紀といわれる19世紀フランスは、多種多様の歴史叙述を生み出した。とりわけフランス革命の余波に揺れる19世紀前半に歴史を描くことは、現在という時代を理解し、未来に開かれた歴史の方向を探索する試みとなっている。シャトーブリアン、ミシュレ、アレクサンドル・デュマ、バルザックなど多くの作家や歴史家がそれぞれの手法で歴史を作品の中に描き入れている¹。

この時代に生きたジェラルド・ド・ネルヴァル（1808-1855）は、個人的回想や狂気の幻想などを書き綴った「私」語りの小品で知られており、ブルーストとともに「追憶の作家」と呼ばれる詩人である。一見、大文字の歴史とも歴史叙述の問題とも無関係のように見えるのであるが、作品を同時代の文脈の中に置き直し、丹念に読み解いてみると、その随所に同時代と共通する問いかけを見いだすことができる。それはフランス革命という断絶への痛切な問いかけであり、歴史のエクリチュールに関する真摯な考察である。今回の論考では、この中でも特に歴史叙述に関する考察に焦点を絞って、ネルヴァルの作品を分析したい。

本論に入る前に、本稿で扱う作品の紹介をしておこう。ネルヴァルは主要作品である『火の娘たち』（1853）や『オーレリア』（1855）を発表する

1 19世紀における歴史叙述の問題については、数多くの研究が発表されているが、幅広く問題を概観し、主要な論点をまとめたものとして次の研究が挙げられる。
小倉孝誠『歴史と表象 —近代フランスの歴史小説を読む』新曜社、1997。

前の1852年に『幻視者たち』という作品集を発表している。これは16世紀からフランス革命期までに生きた6人の異端者たちを描いた伝記作品集であるが、その内の一編「ビュコワ神父の物語」の準備段階を語った作品が、今回分析する『塩密輸入たち—ビュコワ神父の物語』である²。これは1850年に『ル・ナシオナル』(*Le National*)という日刊紙に連載記事(フイユトン)として発表された作品であるが、脱線につぐ脱線によって、歴史叙述の不可能性をユーモラスに物語る一種のメタ小説となっている。作品の最後には「ビュコワ神父」という人物の伝記物語が書かれるものの、その前半部分では、歴史叙述についての考察がさまざまに繰り広げられ、さらに、ネルヴァルはここで初めて「私」語りによって子供時代の回想を語り始めるのである。

以上のように、この作品の中では、歴史叙述の三つの形式——歴史小説、伝記物語、「私」語りによる断片的な史料提示——の各々についての作家の考察と、その実践の試みを見いだすことができる。そこで本論ではこの三つの方法論を辿りつつ、ネルヴァルにおける歴史の詩学を考えてみたい。

1. 歴史と小説のはざまに——カミザールの乱と歴史小説の放棄

『塩密輸入たち』の冒頭で、ネルヴァルはどのような経緯で「ビュコワ神父の物語」を書くに至ったのかを物語っている。作者はフランクフルト

2 *Les Faux Sauniers, L'Histoire de l'abbé de Bucquoy, Le National* du 24 octobre au 22 décembre 1850. 本論で使用するテキストは、以下の版にしたがった。Gérard de Nerval, *Les Faux Sauniers* [以下、FSと略す], *Œuvres complètes*, éd. Jean Guillaume et Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade [以下、NPIと略す], t. II, 1984, p. 3-169. なお、『塩密輸入たち』の中でも『幻視者たち』の『ビュコワ神父の物語』に再録された部分は、次の版の頁数を記す(*Les Illuminés*, NPI, t. II, p. 903-945 [以下、*Bucquoy*と略す])。

への旅行中、古書市で偶然一冊の本を手取るが、それがビュコワ神父についての物語であった³。ビュコワ神父とは、17世紀、ルイ14世の治世下にバスターヌ監獄からの脱獄に成功したという実在の人物である。作者はこの書物をもとに歴史研究を書こうと思いついたのだが、パリに戻った後、図書館や書店を訪れても同じ本が全く見つからない。その人物は本当に実在するのか、架空の人物ではないのか、という疑いまで浮上してくる中、語り手は資料調査に奔走することになる。さらに同年、新聞連載小説の発行を抑止しようとする規制法案（リアンセー法改正案）が可決されていた⁴。このリアンセー法改正案は、新聞連載小説 *roman-feuilleton* に対して、多額の印紙税を課税するというものであり、1848年の二月革命以降、「社会主義的」傾向を持つ作品の発表を抑制しようという反動的政策の一つだといわれる。文学への政治介入の強化を感じつつ、ネルヴァルはこの規制から逃れようと、自ら執筆しようとしている作品が「歴史小説」ではないことを繰り返し強調する。次の引用は、ビュコワ神父についての調査のために、語り手がパリのマザリーヌ図書館の司書と話し合う場面である。

3 [Bucquoy, Jean-Albert d'Archambaud, comte de ; attribué à Du Noyer, Anne-Marguerite], *Événement des plus rares, ou L'Histoire du Sr. abbé Comte de Buquoy, singulièrement son évasion du Fort-l'Évêque et de la Bastille*, l'allemand à côté, revue & augmentée, deuxième Édition avec plusieurs de ses ouvrages, vers et proses, & particulièrement *La Game des femmes*, Bonnefoy, & se vend chez Jean de la Franchise, rue de la Réforme, à l'Espérance, 1719 [以下、*Événement* と略す]。この書物は、実際にはデュノワイエ夫人というプロテスタントの女性が書いたものであった。

4 Voir FS, p. 5. リアンセー法改正案の条文は以下の通り。« Tout roman-feuilleton publié dans un journal ou dans son supplément sera soumis à un timbre de un centime par numéro » (l'article 14 de la « Loi sur le Cautionnement des Journaux et le Timbre des Écrits périodiques et non périodiques », publiée le 16 juillet 1850 in J. B. Duvergier, *Collection complète des lois, décrets, ordonnances, règlements et avis du conseil d'Etat*, année 1850, p. 321).

「この本が入り用なのは、歴史の著作のためなのですよ。」

彼は、私を、錬金術の本でも借りに来た人々を見るときのように、しげしげと見た。「わかりました」と、やっと彼は言った。「歴史小説のためなんですね。デュマ風の。」

「そんなものは、書いたことがないし、書こうとも思いません。寄稿している新聞に、一日4～500フランもの印紙という罰金を背負わせたくはないですからね……。もし私に歴史物を書くことができれば、その本を、そっくりそのままの形で出版しようと思うのです⁵。」

何が小説で、何が小説ではないのか、その基準が不明瞭であるために、リアンセー法改正案は、作家に自己検閲を強いるものとなる。ネルヴァルはそれに対し、「これは小説ではない」と繰り返し述べ、歴史と小説とを区別する境界の恣意性を問題にしようとする。

何が小説で、何が小説ではないのか。そのような問いをも無効にするかのように、『塩密輸入たち』の中で、語り手である作家は次々にユーモラスな脱線話を繰り返し広げる。

だが、こんな下調べをしていて、何になるというのだ？ 私に許されているのは、ただ、フロワサルやモンストルレの流儀で、事実に演出をほどこすことだけではないのか？——これでは、小説家のウォルター・スコットの方法だと言われそうである。で、私ははなはだ心配になっているのだ、ビュコワ神父の物語の純粹かつ単純な分析に止めるべきではないか、……あの本が見つかったときにも、と⁶。

5 FS, p. 18. 文中の引用には、入沢康夫による既訳（『ネルヴァル全集』筑摩書房、1997-2003、全6巻）を使用した。必要に応じて一部改訂させていただいた部分もある。

6 FS, p. 17.

ある歴史上の人物を描く上で、事実を「演出する」ことができるのか、あるいは「ただ単なる分析」にとどめるのか。特に、歴史的事実を「会話をつかって演出する権利」があることについて、作家はさらに歴史家や年代記作家の例を挙げて主張しようとする。

他方で、作家は歴史を扱うのにいくつもの流儀があることを思うとさらに安堵する。フロワサルやモンストルレは物語に多くの会話を書き入れているが、その真実性を証明しろと言われても当惑したことだろう。[……] 今日では、アレクシス・モンテユは『フランス人の歴史』を会話体で書いている。ラマルチヌ氏も『ジロンド党の歴史』では時折小説風の足取りになる。バラント氏やギゾー氏、ティエール氏なども、多くの点で我々を安心させるものである⁷。

フロワサルやモンストルレらの年代記作家、さらには19世紀の歴史家であるモンテユ、ラマルチヌ、バラント、ギゾー、ティエールに至るまで、対話体あるいは小説的技法は、歴史の真実性と相反するものではない、とネルヴァルは主張する。歴史は物語（歴史も物語もフランス語ではともに *histoire* と書かれる）であるという点で、物語叙述の要請にしたがうものであり、その点で歴史と小説の境界は消失せざるをえない。ネルヴァルはこのようにジャンルの境界を揺るがせることで、文学に向けられた法規制に抵抗しようとするのである。

* * *

とはいえ、歴史小説としてしか書き得ない対象があること、つまり考証

7 FS, p. 135-136.

史料で証明できず、想像力を援用するしかない物語もあることを作家は意識している。ネルヴァルは、現在執筆中の物語が「歴史小説」ではないと示すために、探している書物の内容を次のように説明している。

「この本はバスチーユの特殊な歴史に関わりがあるわけで、カミザールの乱について、新教徒たちの亡命について、また、あの有名なローレーヌの塩密輸入の一味について、それぞれ詳しく述べてあるのですよ。後にマンドランはこの塩密輸入人を利用して正規軍を組織し、数軍団にも対抗しては、ボースとかディジョンとかいった都市を攻略することもできたのですよ⁸！」

さらに、これが歴史小説に格好の素材であることも付け添えている（「しかし、これらの事実を使えば、どれほど美しい小説が書き上げられたことだろうか！ビュコワ神父と「ローラン」隊長は第一級の力を持つ人物だ⁹」）。ここで注意したいのは、作者がビュコワ神父の物語を「カミザールの乱」や「塩密輸入人たち」（さらにはマンドランという伝説的な義賊¹⁰）と結びつけていることである。この三者の直接的関係は件の書物にも明確には記されておらず、歴史的には証明できないものである。それでもなお、ネルヴァルはカミザールの乱の首謀者であるローラン隊長を物語の中に 2

8 FS, p. 7.

9 FS, p. 138.

10 18世紀における伝説的な義賊マンドラン（1724-1755）について、ネルヴァルは『塩密輸入人たち』の中で数度言及している（FS, p. 7, p. 119）。この伝説的な人物については、その死の直後から数多くの著作が書かれている（*La Mandrinade* [1755], *Testament politique de Louis Mandrin* [1755]）。詳しくは、千葉治男『義賊マンドラン―伝説と近世フランス社会』平凡社、1987年を参照のこと。

度登場させ、ビュコワ神父と出会う場面を描いている¹¹。この事実が何を意味するのか、少し立ち止まって考えたい。

カミザールの乱というのは、ルイ14世によるナントの勅令廃止とプロテスタント信仰の禁止にともなって、フランス南部セヴェヌ地方で起こった新教徒の叛乱である¹²。この新教徒たちは、信仰の自由を求めて戦い、時にはルイ14世の正規軍を破りながらも、熾烈な弾圧を受けて非業の運命を遂げている。ジャン・カヴァリエ、ローラン隊長、ラ・ブーリ神父、および叛乱の鎮圧にあたったヴィラルールらの名はサン＝シモンの『回想録』（特に1703年から1706年）にも残されている（ネルヴァルは『塩密輸入人たち』でこうした名のすべてに言及している）¹³。しかし、その弾圧の激しさのために、さらにこの新教徒たちが地方の粗野な民衆であったという事実から、この事件はフランス史において長年歴史家から黙殺されてきた。

まさに「歴史の敗者」ともいえるこの地方叛乱はしかし、ウージェヌ・シュー（1839-1840）やアレクサンドル・デュマ（1840）が歴史小説のテー

11 *Bucquoy*, p. 905-907, p. 917. なお、ビュコワ神父と塩密輸入人との関係は、ネルヴァルが参照したデュノワイエ夫人の著作では次のように記されているだけである。「[...] il [l'abbé de Bucquoy] parla de la manière dont il se seroit conduit dans un cas pareil, & déclama ensuite contre les Impôts & autres choses de cette nature, par lesquelles on met les Peuples au désespoir. Cette conversation ne fut pas du goût d'un misérable Records de Village qui par hasard se trouvoit là, mais que l'Abbé ne voyoit pas » (*Événement*, p. 36-38).

12 カミザールの乱とその表象については、次の著作を参照のこと。Philippe Joutard, *La Légende des Camisards, Une sensibilité au passé*, Gallimard, 1977.

13 サン＝シモンの『回想録』はネルヴァルも参照しているが、カミザールの乱に触れているのは次の箇所である。Saint-Simon, *Mémoires* (1701-1707), *Additions au Journal de Dangeau*, éd. Yves Coirault, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1983, p. 314 ; p. 319-320 ; p. 419-420 ; p. 435 ; p. 459-460 ; p. 468-469 ; p. 515 ; p. 546 ; p. 748.

マに取り上げたことで、1840年頃から急速に脚光を浴びることになる¹⁴。おそらく、歴史小説の隆盛の中、強大な権力に抵抗する民衆蜂起というテーマが格好の素材として注目されたのだろう。1840年から1850年の間に、この新教徒の乱についての評価も一変する¹⁵。そしてネルヴァルがこの叛乱を物語の中に組み入れようとしたのも、まさにこの時期なのである。

しかし、カミザールの新教徒叛乱は、物語の時代背景として言及されるだけで、結果的にこの歴史小説のプロットをネルヴァルが実現することはない。

残念ながら、私たちにはこのジャンルは禁じられている。冷たい現実に戻ろう¹⁶。

歴史小説を放棄するという事——そこには、リアンサー法改正案による制約もあるだろうが、それ以上にネルヴァルにおける歴史意識を見て取ることができると思われる。ネルヴァルは、ルイ14世の圧政に対する民衆

14 Eugène Sue, *Jean Cavalier ou Les fanatiques des Cévennes*, parution en livraison mensuelle dans la *Revue de Paris*, de novembre 1839 à mars 1840 [この小説は19版を重ねている]; Alexandre Dumas, *Les Crimes célèbres, Les Massacres du Midi*, [1840], *Crimes célèbres*, texte établi par Robert Scrick, Phébus, 2002, tome II, p. 417-652. カミザールの乱を描いた歴史・文学作品については、ジュタールの前掲書の参考文献一覧を参照のこと。なお、ミシュレがこの乱に言及するのは1862年のことである (Jules Michelet, *Histoire de France*, Librairie internationale A. Lacroix & Ce, 1877, t. XVI, Chapitre XII : « Les Cévennes », p. 187-206)。

15 フィリップ・ジュタールは、ウージェーヌ・シューの小説『ジャン・カヴァリエ』の諸版を比較して、1840年代から1850年代においてカミザールの受容が変化したことを指摘している。1839年から1840年に発表された小説には、カミザールに対して批判的な描写が見られるが、1850年の版に付された挿絵では新教徒たちは好意的に描かれている。こうしたテキストとイラストのずれは、この時代における受容の変化を示すものである (Voir l'introduction à Eugène Sue, *Jean Cavalier ou Les fanatiques des Cévennes*, présentation de Philippe Joutard, Paris-Genève, Slatkine Reprints, 1980)。

16 FS, p. 139.

の反乱という華々しい事件、あからさまな対立図式というロマネスクかつロマンティックな物語を最終的に避けようとしている。作品で描かれるのはむしろ、ビュコワ神父という無名の人物の脱獄の物語であり、また「塩密輸入たち」による塩課税に対する反抗という、ともに表層の事件史からはとらえがたい隠された抵抗なのである。ルイ14世の弾圧に蹂躪されるカミザールの乱とは異なり、塩密輸入人による活動は、フランス各地で長期間にわたり、あらゆる階層を巻き込んで続けられた運動であった¹⁷。そうした、民衆のゆるやかな抵抗というものをこそ、ネルヴァルは描く方向に向かっているのである。

1850年という時代に、ネルヴァルは民衆の武装蜂起というロマン主義的なテーマをさけ、歴史の深層にかくされた執拗な抵抗を描こうとする。ここには第二帝政を目前にしたネルヴァルの政治的抵抗の変化を見ることができる。1848年の二月革命の失敗を受けて、民衆蜂起の夢は葬り去られた。さらに、様々な抑圧が強められる中で、それでもなお、ネルヴァルはルイ・ナポレオンの圧政をそのまま受け入れようとはしない。そのため一見目には見えなくとも、時代を超えて執拗に引き継がれる抵抗をこそ、物語の中で描こうとするのである¹⁸。

対立の物語から目に見えない抵抗の物語へと、歴史叙述の対象が変化し

17 『19世紀ラールス』(*Grand Dictionnaire Universel du XIX^e siècle*)の«saunier»の項目には次の説明が見られる。「Ce qui, outre la chance de réaliser des bénéfices considérables, donnait force et vie à ce trafic en dépit de tout, c'est que les faux sauniers ne se recrutaient pas seulement dans les basses classes, mais qu'ils trouvaient des appuis, des adhérents et même des recrues parmi les soldats, parmi les gentilhommes, les prêtres et les magistrats, enfin dans toutes les hautes classes». サン・シモンの『回想録』にも何度か塩密輸入人の話題がのぼっている(*op. cit.*, t. II, p. 749; t. III, p. 40-41; t. VII, p. 109, p. 315, p. 365-366)。ネルヴァルもまたサン・シモンを読んだものと思われるが、たびたび塩密輸入人たちについて言及している(FS, p. 119, *Bucquoy*, p. 917)。

18 この点に関しては、以下の拙論で詳述した。Keiko Tsujikawa, « Nerval, le temps à l'œuvre : politique et résistance dans *l'Histoire de l'abbé de Bucquoy* », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, PUF, 2008, n° 3, p. 581-592.

たために、ネルヴァルは歴史小説というジャンルやあらゆるロマネスクな要素を放棄しようとする。そこから、想像力による物語ではなく、史料に裏付けられた伝記という歴史ジャンルに向かうのであるが、それではネルヴァルが「伝記物語」という形式をどのように捉えていたのかを次節で確認したい。

2. 伝記と歴史のエクリチュール——歴史の余白に

『塩密輸入人たち』発表の2年後、ネルヴァルは『幻視者たち』という伝記物語集を刊行することになる。ここにはビュコワ神父の他、レチフ・ド・ラ・ブルトヌヌやジャック・カゾットなど6人の伝記物語が集められている。さらにこの作品は、16世紀からフランス革命期までと年代順に並べられており、そこに作者の歴史意識も読み取ることができると思われる。ネルヴァルはその序文に、「注意深い歴史家であれば見過ごすことのない、思いがけないディテールが見つかることもあるだろう¹⁹」と書いている。ここでネルヴァルが「伝記」という形式を選んだことに注意したい。

伝記、肖像、人物伝が歴史叙述の一形式となりうることについては、ネルヴァルは1845年、アルセヌ・ウーセの『18世紀の肖像』への書評ですでに次のように書いていた。

ある国民のことを知るためには、戦争や政治紛争の物語、あるいは国民の最前列を占める偉人たちの冒険物語を読めばことたりとお考えだろう。しかし、支配的な諸階級の人々の生活、一個人としての人間と事物全体との多様な関わり、これこそが、歴史家が軽んじて小説家や伝記作家にゆだねる一面なのである。この卑俗であっても興味深い

19 *Bibliothèque de mon oncle, Les Illuminés*, NPI, t. II, p. 886.

事実全体について、歴史家はいくらかの一般的な考察以外では気にもかけようとしませんが、実はそこでこそ、社会や政治の革命がひそかに温められているのである²⁰。

「戦争や政治紛争の物語」あるいは「偉人たちの冒険物語」ではなく、「人々の生活」あるいは「一個人としての人間と事物全体との多様な関わり」に目を留めることで、ネルヴァルはいわば日常生活の歴史家であろうとする。そして、そうした日常生活の中にこそ、目に見えない形で進行している社会の変化や後の革命の萌芽を見いだすのである。ここでネルヴァルは、歴史の対象のみならず、歴史時間の意識をも変化させようとしている。歴史的大事件という政治史の背後に、より緩慢な変化が見られることに着目し、その変化に光を当てようとするのである。

ただし、個人の生涯や古文書に残された私生活という素材は、ネルヴァルのみならず、同時代の他の歴史家も様々に関心を寄せていたものだった。例えばオーギュスタン・ティエリは、『メロヴィング王朝史話』（1840）の序文の中で、この6世紀の歴史を描く手法として、「主な政治的事件の契機を糸筋とする連続体の物語」ではなく「何人かの当時の人物の生涯と浮沈とをそれぞれの糸筋とする別々にまとまった物語²¹」を選びとったと書いている。また、同時代の別の歴史家、アマン＝アレクシス・モンテユは、『フランス人の歴史——過去5世紀における職業の歴史』（*Histoire des Français des divers états aux cinq derniers siècles*）（1828-1844）という著

20 « *Portraits du dix-huitième siècle* par M. Arsène Houssaye », *Le Constitutionnel*, 28 janvier 1845 ; NPI, t. I, p. 897-898. Voir Arsène Houssaye, *Galerie de portraits. Le Dix-huitième siècle ; les poètes et les philosophes ; la cour et le théâtre ; la peinture*, nouvelle édition, Charpentier, 1845. このウーセの本は、増補改訂版を繰り返し、1890-1891年には第12版が刊行されている。

21 Augustin Thierry, *Récits des temps mérovingiens*, Librairie Garnier Frères, 1840, p. 5.

作で14世紀から18世紀までのフランス人の職業生活を描いている²²。日常生活のディテールを寄せ集めることで、時代の全体像を描き上げようとする野心は、この1840年代に特有のものだったといえるだろう²³。

では、ネルヴァルの作品もそのような全体史の一つとして読むことができるのだろうか。ネルヴァルの試みは、むしろそれとは反対に、歴史の総体から零れ落ちる事実があることに着目する点にある。ある個人と時代が切り結ぶ関係について、『塩密輸入人たち』の作者は次のように述べている。

——また、話が私事にわたって申し訳ない。だが、ビュコウ神父の生涯が、——単純から複雑へと進む周知の分析方法によるならば——一つの時代全体をそっくり明らかにすることもできると、思われるのだが、それと同様に、作家の生き方というものは、世間には隠されている片隅をもつ他の人々の生き方よりも公開されているのだから、一つの社会で起こるありふれた出来事についての典型例を、必要とあれば、自分自身に起こった事柄でもって示さなければならないものだ、

22 Amans-Alexis Monteil, *Histoire des Français des divers états aux cinq derniers siècles*, ouvrage couronné deux fois par l'Institut, nouvelle édition augmentée d'une préface par M. Jules Janin, Coquebert et Furne, 1842, 10 tomes [la première édition est parue chez Janet et Cotellet, etc., 1828-1844, en 10 tomes]. この序文を書いたジュール・ジャンナンは、モンテユのことを、初めて民衆を歴史の中に登場させたと指摘している（« [Monteil est le] seul historien qui ait mis l'histoire à la portée du peuple, ou plutôt le seul qui ait enfin introduit le peuple, et pour la première fois, dans ce drame immense de l'histoire dont il était chassé depuis tant de siècles » (p. II). ネルヴァルも『塩密輸入人たち』の中でモンテユに二度言及している。

23 19世紀の文学、哲学、科学における「集成」(assemblage)の重要性については次のアラン・コルバンの論文を参照のこと。Alain Corbin, « Le XIX^e siècle ou la nécessité de l'assemblage », *L'Invention du XIX^e siècle, Le XIX^e siècle par lui-même (littérature, histoire, société)*, textes réunis et publiés par Alain Corbin, Pierre Georgel, Stéphane Guégan, Stéphane Michaud, Max Milner et Nicole Savy, Klincksieck, Presses de la Sorbonne nouvelle, 1999, p. 153-159.

私には思われるのである²⁴。

ネルヴァルは、次第に文学への圧力を強めていく同時代の政治状況と、17世紀にビュコワ神父が生きた絶対王政期とを重ねあわせ、ともに一個人に加えられる抑圧という「世間には隠されている片隅 (recoins obscurs)」を通して、ある時代の社会状況や精神状況を明るみに出そうとするのである。

それでは、ビュコワ神父という無名の人物の肖像を通して、ネルヴァルはどのような時代の側面に照明をあてているのだろうか。塩密輸入との関与を疑われた神父は、その後逮捕と脱獄を繰り返すが、この物語の筋に附随して、歴史資料から汲み取られた日常生活のディテールが数多く作品内に書き込まれていく²⁵。例えば、ルイ14世の治世末期に、次第に「フランス臣民は、他に方法がなかったので、歌で復讐をした²⁶」とネルヴァルは書き、その上でバスチーユの壁に書かれた落書きとして、国王やマントノン夫人を批判した警句詩や四行詩を引用している。

ミラノ、ナポリ、シチリア、スペイン、オランダを、
戦いで失っても、ルイは慰められるだろう
マントノンさえいれば、この王様には、
残りの全世界を持つようなもの²⁷！

バスチーユ監獄という圧政の象徴に、これらの引用を散りばめることは、

24 FS, p. 95. 強調は筆者による。

25 ネルヴァル『塩密輸入人たち』の典拠については、Jacques Bony, *Le Dossier des « Faux Saulniers »*, Namur, Presses universitaires de Namur, 1983を参照のこと。

26 FS, p. 120.

27 FS, p. 159; citations d'après Constantin de Renneville, *L'Inquisition française ou l'Histoire de la Bastille*, Amsterdam et Leide, 1724, 4 vol. et 1 vol. de supplément.

単に物語の舞台背景を描くだけではなく、日常の抵抗の一端を活写するものとなる。

また、ビュコワ神父は脱獄の合間に、カフェ・ローランやマレの城館など知古のもとに身を隠そうとするが、こうした場合は、フロンドの乱など絶対王政への反逆者の残党が集まる場となっている。カフェ・ローランには「かの美しのニノン〔・ド・ランクロ〕の常客」が集まったとして、ネルヴァルはさらに次のように述べている。

そこに集まって来るのは、当代の「享樂主義者」^{エビキュリアン}たちで、彼らは懷疑主義と陽気さのヴェールの下に、ちょうどハルモディオスとアリストゲイトンが薔薇の花の下に剣を隠していたように、暗黙の、忍耐深い反抗の名残りを隠しているのだった²⁸。

紀元前6世紀の独裁者の暗殺（ハルモディオスとアリストゲイトン）に言及しながら、ネルヴァルは歴史の表層からは隠された「暗黙の、忍耐深い反抗の名残り」を描き出すのである。

絶対王政に対する静かな抵抗は、フランス国外での亡命者によっても続けられる。ビュコワ神父はバスチーユからの脱獄に成功した後、オランダで亡命生活を送るが、そこでも周囲に反逆者たちを集めている。「こうして神父は、いたるところで、あらゆる種類の迫害によって外国へ追い散らされた連中（新教徒たちだけではなく大胆な旧教徒たちも含む連中）からなるフランスの賛同を得たのだった²⁹」。さらには、「フランスにふさわしい共和政体案」および「君主政治を廃止する方法」についての著作を発表

28 *Bucquoy*, p. 912. 強調は筆者による。

29 *Bucquoy*, p. 943.

したことから、ネルヴァルは神父を「フランス大革命の先駆者の一人³⁰」と評するのである。なお、ビュコワ神父の脱獄を描いた書物（ネルヴァルが典拠として用いた書物）も実は、デュノワイエ夫人というプロテスタントの女性が、新教徒の迫害を受けて、亡命先のオランダで発表した回想録であった³¹。新教徒の亡命者が残した書物、さらには検閲により禁止された歌や詩を「引用」することによって、ネルヴァルは公式の歴史から排除されている存在に光を当てようとするのである。

社会に知られない歴史の周縁を通してある時代を描くことは、正史を批判的に解体するものとなる。歴史がある時代の全体像を再構成する上で、恣意性が働いていることをネルヴァルは次のように指摘している。

人はだれしも、思索によって自分の起源や思い出を遡って知りたいという思いを心に抱いているものだ。——それが、イギリスではウォルター・スコットが、フランスではオーギュスタン・ティエリやモンテイユその他の人々がおおいに受けている理由なのである。フランスの歴史は、ベアルン人〔アンリ 4 世〕の子孫たちが確立しようとした、あの絶対君主制の原則の影響をこうむって、二世紀以上も前から無惨に歪められてきた。——作家たちとしては、世のしきたりに従うか、それともフランスの外へ行って物を書くかしなければならなかった。——結局は、作家たちは残り、絶対君主たちが去って行った³²。

30 *Bucquoy*, p. 941-942.

31 Voir [M^{me} Dunoyer], *Lettres historiques et galantes de deux Dames de Condition, dont l'une étoit à Paris, & l'autre en Province*, Ouvrage curieux, nouvelle édition, revûë, corrigée, augmentée & enrichie de Figures par Madame de C***, Amsterdam, Pierre Brunel, 1732, 5 tomes. 彼女もまた、カミザールの乱の首謀者たちについて書き残している。Voir « Histoire de Jean Cavalier, Chef des Camisards » (t. II, p. 165-177) et l'histoire sur l'abbé de La Bourlie, Marquis de Guiscard (t. V, p. 23-36).

32 FS, p. 82.

絶対王政の権力によって歪曲されがちな「歴史叙述」に対して、作家は「思索によって」「起源や思い出に遡る」ものとされる。各時代に承認され「正史」、あるいは歴史叙述の「しきたり」を拒絶する作家は、フランス国外に出て、書物を書き残すしかない。さらに後世の作家や歴史家は、そうして国内外で散逸した書物が存在したことを示し、それらを再度書物に書き写すことで、忘れられた記憶と同時に、権力の恣意性自体をも指摘するのである。

歴史的史料に基づいた伝記物語を書くことによって、ネルヴァルは歴史の周縁に位置する人物や事件から一時代を描き出そうとする。「正史」が意識的に、あるいは無意識的に行う抑圧や忘却に対して、記憶あるいは追憶によって「もう一つの歴史」を描き上げようと試みるのである。『幻視者たち』という伝記作品集では、歴史の余白に名を記す人物が集められているが、断片的な生の記録を書き留めることで、ネルヴァルは表層には現れない、目に見えない形での抵抗の系譜を浮かび上がらせる。いわゆる歴史ジャンルといえないものながらも、そこには同時代の歴史叙述を批判的に解体するようなネルヴァルの試みが認められるだろう。

3. 歴史と引用 ——古文書、フォークロア、歴史の空白

ビュコワ神父についての文献調査を続ける中で、ネルヴァルはさらに史料の中の欠落や歴史の中の空白に目を留めるようになる。そのために最終的に伝記という物語形式からも離れ、「私」語りの作品の中で、断片的に史料の提示を行うようになる。ネルヴァル主要作品につながる「私」語りがいかに歴史のエクリチュールと関わるのか、ここでは、史料の「引用」の問題、特に書かれた言葉が持つ物質性に注意しながら読み進めたい。

『塩密輸入人たち』の中で、語り手の作家は、ビュコワ神父という人物が、架空の人物ではなく、実在の人物であることを証明するために、様々な図書館や古文書館をめぐり、資料収集を行おうとする。そして、見つかった古文書や証言を見ている作家の「私」を描きつつ、史料に残された言葉をそのままに書き写していく。例えば、次の文章は、1709年の警察の調書の中にビュコワ神父への言及を発見する場面である。作家はただ単に史料を引用するだけではなく、そのマテリアルな側面をも細やかに描写しようとする。

学者という美名を戴く権利はないのに、どんな作家も、時おりは、学術的な方法を用いることを余儀なくされるものである。で、私は、ダルジャンソンの署名のある報告書の、オレンジ紙の上の黄ばんだ筆蹟をためつすがめつ調べはじめた。「ご指示たまわりたるあらゆる場所において……」という行の段の余白に、走り書きだがしつかりした筆致で、次の短い言葉が鉛筆で記されていた。「いくらしても、し過ぎることにはならない。」何をし過ぎることにならないのか？——もちろん、ビュコワ神父を探すことだろう……³³。

ここで引用される言葉は、それが書き込まれたという一度限りの事実として、ほとんど身体的といえる仕草と切り離せないものとして、強い現実効果をもって立ち現れる。史料のマテリアルな側面、特に鉛筆で走り書きされた言葉は、警察によるビュコワ神父の執拗な探索という瞬間を、リアルに蘇らせるものとなる。また、同時に、そうしたモノに実際に触れ、確認するという意味で、「私」の存在が不可欠なものとして書き込まれること

33 FS, p. 12-13. 強調は筆者による。

になる³⁴。

史料の引用は、このように、物語に素材を提供するだけのものではなく、個々の言葉が持つリアリティによって作家の感興を呼び起こすものとなる。ネルヴァルはこうして自らが見つけた史料の引用を重ねていく。

「ル・ビルール氏がへたな言い掛かりをがんばり通せずにはおられぬほどにごりっぱすぎる人物であったせいで [……]」

「『彼女は子供に身を害われた』——これは、まったくキリスト教的な言いまわしだ。——当時の、それも地方の言葉をお許しねがいたい³⁵。」

また、バスチーユからの脱獄後、国外に亡命したビュコワ神父に関して、その叔母が王の恩赦を求めた請願書を作者は引用しているが、その文書がまったく歴史的な重要性をもたないものでも、文章の過激さ自体にネルヴァルは時代の証言を見ようとする。

——後に、この記憶すべき女性の請願書を引用しよう。その口調はあ

34 18世紀史家アルレット・ファルジュは、『古文書の味わい』の中で、古文書が歴史家に引き起こす情動の揺れに言及し、そうした感情が「過去や沈黙という石を削るためのもう一つの道具となる」ことを示している。「あたかも、この過ぎ去った世界から、驚きや苦しみ、見せかけにとらえられている人々の、もっとも内密で、もっとも表現されることの稀な瞬間が物的痕跡とともに立ち現れたかのようだった。古文書は、こうした瞬間を偶然に、乱雑にとらえては石化するのである。古文書を読み、触れ、見いだす者は、いつも、確信に満ちた思いにまずとらえられる。誰かが語った言葉、拾った物、残された痕跡は現実の姿をとっているのだ。かつて過去として存在したものの証拠が今そこにあり、決定的に身近にあることを感じる。古文書を開くとき、『現実に触れる』特権を得たかのように思われるのである」(Arlette Farge, *Le Goût de l'archive*, Seuil, La librairie du xx^e siècle, 1989, p. 43, p. 18)。

35 FS, p. 17 ; p. 76. 強調は原著者による。

まりにも過激だったので、人々は彼女自身をバスチーユに投獄すべきではないかと思った程だった³⁶。

ルイ14世の治世にそぐわない古風で率直な表現には、それ以前の時代精神や反骨精神が読み取れる。ここでは、言葉の内容ではなく、表現、口調、調子、エノンシアションが、その時代の日常生活や風習、精神風土までもまざまざと蘇らせるものとなる。

さらに、大文字の歴史から零れ落ちるものとして、ネルヴァルは地方の伝説や口承伝統にも関心を寄せている。当時、ネルヴァル以外にもフォークロアへの関心は高まっていたが³⁷、ここでも興味深いのは、ネルヴァルがフォークロアを単なる歴史のエキゾチスムとしてではなく、歴史の真実を示すものとして、また歴史的時間への批判的検討を促すものとしてとらえている点である。ビュコワ神父についての調査をする上で、ネルヴァルはヴァロワ地方へと旅立ち——これはネルヴァルが幼年時代を過ごした土地でもあり、ルソーが最晩年を過ごした土地でもある——、そこで次のような伝説を書き留める。

私たちについて来てくれていた土地の人が言った。「あれが、美しいガブリエルの幽閉されていた塔でございまして……、毎晩、ルソーは窓の下へ来てはギターをかき鳴らしておりましたが、王様〔アンリ四世〕は嫉妬なさいましてな、何度もすきをうかがったあげくには、とうとう彼を殺させておしまいになったのでございます。」

それにしても、これで、伝説がどんな具合に作られるのかが判るといふものだ。何百年かのちには、これが本当だと考えられるようにな

36 FS, p. 140.

37 Voir Jean-Nicolas Illouz, « Nerval : langue perdue, prose errant (à propos des *Chansons et Légendes du Valois*) », *Sorgue*, n° 4, automne 2002, p. 15-25.

るだろう。アンリ四世とガブリエルとルソーとは、この地方の大きな思い出の人物たちである。それが——二百年のへだたりがあるというのに——もはや二つの思い出は混同され、ルソーは次第にアンリ四世の同時代人ということになって来ている。民衆はルソーを愛しているので、——悩める階層の人々に同情したこの人のためによかれと思うあまり——とうとう、王が彼に嫉妬し、愛妾からは裏切られたのだと考えているのだ。人にこうした考え方をさせる感情は、おそらくはふつう信じられている以上に真実に触れたものなのであろう。ボンパドゥール夫人からの百ルイの金を拒絶したルソーが、アンリのうち立てた王政という建造物を根底から破産させたのだ。すべては崩れ去った。——彼の不滅のイメージは、それらの廃墟の上に立ちはだかって残っている³⁸。

アンリ4世とルソーとを同時代人とするこの農民の言葉は、明らかな時代錯誤であるにもかかわらず、土地に深く根付いた民衆感情を浮き彫りにする点で、ある種の歴史的眞実をはらむものである。いかに眞実から遠く離れたものであっても、この逸話に見られる歴史上の人物の表象は、ブルボン王朝への敵意という民衆の心情を的確に描き出すものなのである。そうした心情の歴史は、当然ながら歴史書に書き残されることがなく、地方の伝説として、ただ忘れ去られることになる。しかし、ネルヴァルは、こうした言葉を書き写すことで、表層の政治史に流れの下に、民衆の感情という、緩慢な時間の流れが存在することを示そうとするのである。そうした緩慢な時間こそが、後のルソー、革命による王政の瓦解という流れを深層で動かす原動力となることを、ネルヴァルは静かに指摘しようとする。

現代の歴史家ナタン・ヴァシュテルはフォークロアを「現在に生きる過

38 FS, p. 103-104. 強調は筆者による。

去」と定義し、それが勝者による歴史の拒絶、敗者の抵抗の手段であると指摘している。歴史の変化に対して、フォークロアという緩やかな時間によって抵抗することの意味、そしてそこに見られる心情の真実性に、ネルヴァルは早くも目を留めていたといえるだろう³⁹。

また、史料の素材を描き、それを確認する作者の姿を描くことで、ネルヴァルは、史料の中の欠落、史料が語らないものをも浮き彫りにしていく。ビュコワ神父の大叔母であるアンジェリックは、一家の家系図から名が消されており、さらに、調査途中に偶然見かけた墓碑銘も歴史書も、ある点では沈黙せざるをえない。

——娘については語られていない。

「ここにアルマゾール眠る。」これは道化であろうか？——従僕であろうか？——犬か？ 石はそれ以上何一つ語ってくれない。

ローラン隊長がどうなったかは、歴史はその後何も伝えていない⁴⁰。

言葉を、それが刻まれた媒体やその物質性とともに書き写すことで、ネルヴァルはそれらが確かに存在したこと、そしてそれが「消された」という事実に光を当てようとする。「引用」としてこれらの言葉を書き写すことは、歴史が語らないことを指し示し、やがて消えるべき言葉を消失から

39 ナタン・ワシュテル著『敗者の想像力—インディオのみた新世界征服』小池佑二訳、岩波書店、1984年、p. 45。この研究に関して、ジャック・ル・ゴフは次のように述べている。「敗者は、本当の歴史の変わりに『拒絶の手段としての伝統』を自らのために作り出す。このように敗者がつくる緩慢な歴史は、勝者がつくる急速な歴史に対する反対と抵抗の一形態なのである」（ジャック・ル・ゴフ著『歴史と記憶』立川孝一訳、法政大学出版局、1999年、p. 226）。

40 FS, p. 82, p. 104, p. 139.

救う避難所としての役割を果たすものになる。

数々の古文書や証言、伝承やフォークロアなど、引用を重ねてある時代を断片的に浮かび上がらせることは、単に時代背景を描くだけではなく、書かれた歴史の背後に、決して歴史に書かれえないものが存在すること、政治史とは別の時間が存在するという、歴史時間の重層性をも示すことになる。「私」という視点から、断片的な引用を重ねあわせることで、ネルヴァルはそうした不在や空白の存在こそを作品内に書き留めようとする。これは読者に歴史意識、時間意識の変更をも迫るものとなるといえるだろう。

結論にかえて

歴史小説から伝記物語へ、そして伝記物語から「私」語りの断片的な史料の提示へ——ネルヴァルにおけるこのような歴史のエクリチュールの変化には、1850年の社会状況の反映のみならず、歴史叙述についての作家の明晰な考察を見ることができると思われる。それでは、ネルヴァルの過去意識はどのように規定することができるだろうか。同時代の歴史家ミシュレはそのフランス史を「生の完全なる復活」と定義している。古文書や歴史書を咀嚼した上で、それらを一つの生きた「歴史」として再び生命を吹き込む歴史家と比べてみると、ネルヴァルにおける歴史叙述はどのようなものであったのか。この問いに一つの答えを出すために、ネルヴァルのテキストから最後に2つの抜粋を読みたい。一つ目は1836年に書かれた新聞記事の一節であり、二つ目は『塩密輸入人たち』の中で語り手が友人とともにルソーの墓に詣でるエピソードの一部である。

何と多くの宗教や社会が、亡骸も影も残すことなく滅んでいったこと

だろう。しかし、それらの外形であった芸術だけは、その存在を証言するものとして唯一残されている。絶滅した生物の貝殻や見事な鱗のように⁴¹。

「ルソーの遺骨はないにしても、墓参りに行くんだ。静かにしよう。
あの人がここに残した思い出は、遺骨に十分匹敵するものだ⁴²。」

「絶滅した生物の貝殻や見事な鱗」のように、芸術や古文書あるいはフォークロアは、過去の社会や生きた生活の「外形」を伝えるものとなる。そうした外形は、その中にかつて存在したものへの夢想を誘い、かつそれが消失したことをも鮮明に指し示すものとなる。過去の痕跡を書き写すことは、残された「殻」を描き出すとともに、もうそこにはない「何か」をも喚起するものとなる。ネルヴァルがそこに見いだそうとしたもの——それは、おそらく土地に残された思い出や愛着、無名の人物の敵意や反骨心、信仰心や愛情、夢や狂気など、形にならない心情の痕跡であったといえるだろう。物語によってではなく、言葉の引用によって過去を再構成することで、ネルヴァルはマテリアルに消失した過去とともに、そこに残された情動の痕跡をも書き留めようとする。ネルヴァルにおける過去の言葉の引用は、作家の歴史の詩学と強く結びつく点でなおも興味深く思われるが、この点については稿をあらためて再考したい⁴³。

41 *Le Carrousel*, le 25 juillet 1836 ; NPI, t. I, p. 1646 [l'article n'est pas signé]. 強調は筆者による。

42 FS, p. 92. 強調は筆者による。

43 本稿は、2009年11月26日に京都大学文学研究科で行われた科学研究費補助金研究会「フランス文学における歴史記述の総合的研究」での発表原稿に加筆修正を行ったものである。発表の場をもうけて下さった田口紀子氏および数々のご指摘を下された参加者の方々にあらためて感謝したい。